編輯室內外

紀元二千六百三年の新且を迎へて回顧すれば、緒戰以來輝かしき戰果の連續であつた。即ち勝利に明け感激に暮れて一年餘を經過し何とも云ひ得ぬ感じがする。來るべき一年に於ても愈々前線に於ては益ゝ戰果を收め、敵國の息の根を止めるまで戰ひ抜いて貰ひたきものである。舊臘十一日より同十三日の間　天皇陛下には大戰下に於かせられて親しく神宮に御拜、戰勝を御奉告の上神恩を奉謝あらせられ、神靈の御加護を翼はせ給ふた、承るだに恐懼の極みである。吾人は一生懸命全力を注ぎて宸襟を安んじ奉らねばならぬ。夫れで銃後にある國民一體が私利私慾を後廻しにし、官吏も商人も生產業者も戰時態勢に順應して一意專心勝て勝て勝ちぬく覺悟に出でてもらひたい。苟くも贅澤は今日にすべく明日を待つべきでない。金儲けは今である、後日は待てないなどと考へて此に力瘤を入れるべきでない。道理は道理、現實は現實などと思ひ誘惑の儘に生活することは禁物である、否寧ろ罪惡である。吾れも人も愼みつゝしむべきことである。

〇「戰ひ抜かう、勝ち抜かう二年目」の合言葉も何處へか、之を人と事として他の奬勵の言葉として、激鬭の辭として受取りながら、絃歌さんざめく紅燈の巷には時間を忘れ前線將兵の苦勞を思はず、飲み、食ひの消費生活を追ひ求めてをる者が如何に多きことか。大藏當局の調查に依れば遊興飲食稅の昭和十六年十月末現在は六千九百七十二萬七千圓（三月―九月）であつた。そして十七年十月末現在は二億二千百十九萬五千圓、差引實に一億五千百四十六萬八千圓の激增である。尤もこの數字は額面通りの激增ではなく、戰時增稅を目指し十六年末に斷行された藝娼酌婦花代、普通飲食稅率の引上、同じく普通飲食稅、宿泊料の免稅點引上げのための當然の增加率が含まれてゐるとはいへ、なは弛緩の烙印は拭はれないといふのは、大藏省が增稅を見越して計上した十七年度歳入豫算のこの部分は三億六千二百五萬八千圓であり、これを十月末までの七ケ月分に換算すると二億一千百二十六萬圓となり、約三割方の減收が豫想されてゐたに拘らず、七ケ月分の稅收入は前記の如く二億二千百十九萬五千圓であり、豫想額に比し九百九十三萬五千圓上廻りしてゐるからだ。何んと驚くべきことであり、長大息すべき事象ではなからうか。

〇日本は自己讃美が多過ぎるのではないか、といふ疑問をもつものは獨り芳賀檀氏のみではない。此自惱れの風潮が無意識にもせよ、國民の心理に滲透すると其の結果として獨善的な傾向に陷ることがないとも限られない。日本が眞に大東亞の盟主として東亞共榮圏を指導しゆく爲めには、まだ日本自身が自己錬成訓戒すべきところが頗る多いのである。前項遊興稅增加に見ても非常な努力が必要以上必要である。

〇青木大東亞大臣の「大東亞建設の基成」と題する放送中に、大東亞諸民族の團結を鞏固にし協力一致を如實に具現する爲には「各國民間に個人生活を通して、眞の親善融和關係を成立せしめることが極めて必要である。特に日本國民は他の國民住民に接するに當り常に大國民の態度を持し、自然に尊敬と信賴をかち得るやう心掛けねばならぬ」と言はれた。實に然りである。サウなくてはならぬ次第であるが、遊興に日を費やし浪費に時を費やす徒の如きものありては尊敬と信賴とは何處に之をかち得るであらうか。東亞の新秩序を建設せんとするの今日疑問である、大疑問である。

〇佛蘭西は謎の國であるか、ダルラン傀儡政權を繞る紛爭と睨み合せて獨佛兩國の關係は、最近極めて微妙な動きを示してラヴアル首相は頻繁にパリを訪問し、ドイツ代表と頻に交涉を繼續してゐる模樣であるが近ぐラヴアル首相を首班とする單一政黨が生誕すると傳へられ、又ペタン元帥がラヴアル首相と同席でフオンルントシユテット獨元帥と會談したとも傳へらる。とにかく獨佛が協力して米英を討滅する日の近からんことを望む。（一二、二〇沘）

停

定價一部　五十錢
一ケ年分　金六圓

東京市麴町區霞關一丁目內務省內
發行所　社團法人　道路改良會
電話銀座(57)〇四二七
振替口座番號東京一九〇二六六

東京市赤坂區氷川町一七
發行者 編輯者　平井良成

東京市小石川區諏訪町五六
印刷所（東東三一〇）　株式會社　常磐印刷所
印刷者　奈良直一

日本出版文化協會會員番號二二〇〇四五